（おねしょ）の話

『寝小便』と書くと、何となく汚い気持がするものだが、『おねしょ』と書けば、何となく、ほのぼのした感じになってくるのは私だけだろうか。医学用語では、『夜尿症』というらしい。『症』という文字がつくのだから病気の一つなのだろうが、どうにも私には信じられない。

私の娘は三才になると、ほとんど、お寝小をしなくなっていた。私のすぐ下の妹は、幼稚園か小学校低学年まで続いていた記憶がある。ところが自分は、けっこう遅くまでしていた。

家では通称『お寝小蒲団』と呼ばれていた、一平方メートル程の小さな敷き蒲団を何時も敷いていた。中学二年で宇都宮に越した時、まだ荷物の中に入っていた。

朝になるとお尻の廻りが妙に冷たい。そんなときはいつも、辺りが湿地帯になっている。あわてて飛び起き、箪笥の中から下着を出し着替え、悪びれもせず学校へ行く。帰ってくると布団が干してある。

その頃は、たいていの人が自分と同じだと思っていた。当時、誰に確認するでもなく信じていたのだ。

小学校の修学旅行や、林間学校の時、

「寝る前には水やジュースを、絶対飲まないように！」

と、母親は釘を刺したものだ。良い子の私はその教えを守っていた。そのせいか、そういった公式の場では、したことがなかった。

犬などの動物は、小便で自分の縄張りを主張している。自分は前世がそういった動物であって、その名残が強くあったのだろう。しかし、家で飼った犬を見る限りでは、犬小屋の中でお寝小はしていなかった。さて：、すると自分の場合は、病気だったのだろうか？

時々、四才になった娘が、

「おしっこが、でちゃたよー」

と、泣いて起きだしてくる。

すぐにわかるのだから立派なものだ。当時の私は、朝までわからなかったのだから。、

（よしよし、子供はそれでいいんだよ）

何か安堵感を覚える。

（人間は、年をとると子供に戻るものらしい）

もしも、それが本当だっだら・・・。

一抹の恐怖が脳裏をよぎっていく。